# 第２節　相川の生活文化と地域文化

## １．鉱山に由来する工芸技術

### （1）鉱山と無名異焼

#### ⅰ）はじめに

唐津焼、信楽焼、瀬戸焼など日本の著名な焼き物は、それを生産する土地の名前で呼ばれている。しかし、佐渡相川の焼き物は佐渡焼、相川焼というよりも、無名異焼という名称で広く知られている。地名ではなく「むみょうい」とふりがながないと読めない不思議な名前をもつ物質から名づけられた、相川の焼き物の歴史を振りかえる。（敬称略）

#### ⅱ）無名異について

無名異は「佐渡に産する赤色の粘土。硫化鉄が酸化したもので、陶器の原料に用いる」と『広辞苑』にある。中国では漢方薬の名前に由来するという。島根県の石見銀山では、慶長18年（1613）に無名異山が発見され、薬物として将軍家に献上したと伝えられている[117]が、佐渡で知られるのはかなり遅く、寛政４年（1792）、幕府へ報告した佐渡産の薬種・石類のなかに「赤玉・木葉・鮎石・（中略）・無名異・（中略）・矢根石」と出てくるのが最初である[118]。また実用されるのはもう少しあとの文化・文政期になってからである。

『佐渡志』[119]には「無名異、雑太郡中尾山、羽茂郡篠川山に産す。舶来のものと形似は同じからずして、効能は却って勝れり」とある。この中尾山からの無名異の発見は「鉱山より出づる無名異は、相川の人古川友八の発見にて、其主成分は水酸化鉄より成り、昔は内服すれば瘀血を流し、食毒を消し、外用すれば出血を止むと称したり。而してこれを陶器に創製するも亦古し」[120]とある。また、同じ頃幅野今八が岱赭墨（朱墨）に作り絵画用に販売を始めている[121]。

#### ⅲ）江戸時代の窯業

金銀山から採掘される無名異を使って焼き物を始めたのは、羽口屋伊藤家の七代目の甚兵衛である。羽口というのは、圧縮した風を炉に送る鞴の送風口の先につける素焼の筒である。金銀の製錬にたくさんの鞴が使用されたので、羽口などを作る専業の職人がいた。その職人は羽口屋と呼ばれた。伊藤甚兵衛もそのひとりで、先祖は加賀（石川県）から佐渡へ渡ってきた。羽口のほかに、灯皿・焙烙・手あぶりなどの素焼の日常品を焼いていた。四代目伊兵衛は佐渡奉行所の命で江戸へ瓦の焼き方を習いに行っている[122]。また「当時の甚兵衛は楽焼も出来申候」[123]、「楽焼は七代伊藤伊兵衛の創製する所にして文政中より陶土に無名異を交へて焼くことを発明し盃抹茶碗等を作りたり、是を無名異焼の元祖とす」[124]とある。

同じ頃、施釉陶器を作り始めたのは買石という製錬業者を先祖にもつ黒沢金太郎である。金太郎は他国で焼き物の技術を習得して帰り、相川の土と鉱石の製錬カスであるカラミから作った釉薬を使い、高火度焼成に成功したと伝えられている。寛政12年頃奉行所より焼き物渡世の許しを得て、擂鉢・片口・甕・壺などの生活用具を焼成した[125]。二代目甚兵衛の長男文四郎も天保２年（1831）、分家して陶業を始めた。のちの赤水窯である。

このように相川の焼き物は、流人の子孫の古川友八が金銀山から無名異土を採り、金銀山に関わる職業の伊藤甚兵衛や黒沢金太郎が成型・焼成するという、鉱山都市ならではの組合わせによって生まれた。また、茶の湯や書画を楽しむ佐渡奉行や役人、京・大坂から来た商人たちの文化に刺激され育てられた。

無名異焼の評判は、佐渡を訪れた人々からも広まった。探検家の松浦武四郎は「墨となし、画の具に用ひてよし、焼土にまぜて茶碗、土瓶、盃等の器となし、常に用ゆれば、諸毒を消し、長生の養ひとす」[126]と、無名異の薬用の効能に加えて焼き物も紹介している。

### ⅳ）明治時代以降の窯業

明治時代に入ると鉱山は官営となり、外国からの技術や機械を導入して、幕末に落ち込んだ産金の増大を図る政策が採られた。外国人技師を招いての、火薬の使用・洋式製錬の採用などで近代化が進められた。この政策は多数の失業者を生むことになり、社会不安を引き起こした。

三浦小平次（古着商・米屋兼業）は幕末より国産方世話係、佐渡県の鉱山用達勧業方となり、養蚕・製紙・製陶などの事業を興し、失業者の新たな雇用をつくろうとした。小平次は陶器製造の引受人になった。焼き物の心得はなかったが、島外から職人を招いて指導を受けるだけでなく、産地へ研修に行かせるなどして相川の職人を育て、試作を重ねて楽焼であった無名異焼を、中国の高火度で焼成した朱泥焼と同質の焼き物を作ることに成功した。明治 10 年（1877）、第一回内国勧業博覧会に菓子器を出品し、花紋賞牌を受けた。この頃から常山と名乗り、作品に「以佐渡金銀山無名異造之」と印した。無名異土で焼いた作品は最初の頃は朱泥焼と呼んだが、次第に無名異焼に統一された。

一方、伊藤富太郎（文四郎の三代目）も、長年の経験を生かして高温焼成の朱泥焼に成功し、赤川の近くに窯を築き、明治 31 年より赤水を名乗るようになった。

この頃より茶陶や彫塑などの美術工芸を目指す窯元と生活用具を専業に焼く窯元にわかれるようになった。また、次第に常山窯から独立した窯や本州の産地で修行して相川へ帰って窯を開くなどで、昭和 20 年代から窯業は相川の主要な産業になった。昭和 60 年（1985）頃には相川に 15 の窯が、佐渡全体で 40 の窯があり、展覧会での受賞者も増えた。

### ⅴ）窯業の現況

このような中から、平成９年、三代目常山の孫にあたる三浦小平二が青磁陶器作家として重要無形文化財技術保持者（人間国宝）に認定された。小平二は、中国南宋官窯の青磁作品の生地が佐渡の無名異焼の土と同じであることに気づき、自分が青磁を目指すことに運命的なものを感じたと常々語っていた（平成 18 年没）。また、五代目伊藤赤水は平成 15 年、無名異焼で重要無形文化財技術保持者（人間国宝）に認定された。

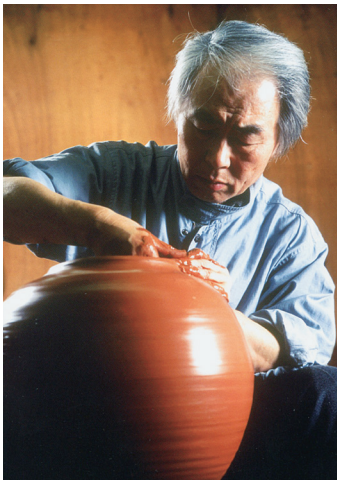

図３―４６　無名異焼の製作

窯業の現況は、観光の低迷・食生活の変化・廉価な工業製品の普及によって販売量が落ち込んだ。さらに他地にない原料の確保などさまざまな課題を抱えているが、体験学習を通じて無名異焼の歴史の周知やアマチュア作家の増加と、相川の焼き物を支える底辺はしっかり広がっている。江戸時代はじめより金銀山の歴史の中から生まれ、育てられてきた無名異焼は、佐渡の誇るべき文化財になっている。　（柳平則子）

## （2）裂織と地域の生活

### ⅰ）はじめに

佐渡では、古木綿布を細く裂いて、ヨコ糸に使って織った織物を「裂織（さきおり）」と呼ぶ。またその布で作った衣料も裂織と呼んでいる[127]。古木綿布を再利用して織る裂織は佐渡独自のものではないが、金銀山の歴史とともに暮らしてきた人々の知恵と工夫から生まれ、生活の中に根づいて伝承されてきた。（敬称略）

### ⅱ）裂織の背景

近世初頭の金銀山の発見によって、十数軒の寒村は人口５万人余を抱える大鉱山都市に変貌した。金銀を求めて全国からさまざまな職業の人々が集まってきた。急速に増加した人口を養うために、食料の確保が急がれ、石見（島根県）から鱈の延縄漁法をもつ漁師がきて姫津という漁村ができ、海府の海成段丘上では水田開発が進められた。

相川の北にある大佐渡北海岸地域は、古くから海府と呼ばれ、海に潜って漁貝類を採り、塩を焼いた海部の住んでいた所であった。現在は、海成段丘の上に広がる水田と、その背後にある豊かな山林で生計を立てる村になっている。海から陸へ、農業を中心とする生活に変わったのは、前述した水田開発によるものである。また、山から留木用材・製錬用の炭など金銀山に必要な物資を供給する鉱山都市相川を支える地域になった。

岩谷口の船登源兵衛は、江戸時代初め頃より廻船業を営み、留木や炭を相川へ運搬していた。また、新潟や敦賀から塩・米・砂糖・布・紙などを運んでいた。船登家に残る膨大な古文書の中の「大坂買物覚」（元禄期）に木綿布や木綿縞布を購入した記録がある。また「さきおり草 74 俵」も購入している[128]。この頃から、木綿布・

繰綿・裂織グサ（裂織の材料）が廻船で相川へ運ばれてくるようになることがわかる。

衣料は麻類（チョマ・ヤマソ類も含む）が中心であったが、江戸時代中頃から木綿が衣料に使われるようになった。棉（わた）は亜熱帯性植物なので、北陸や東北は栽培に適さなかった。これらの地域には廻船によって繰綿･布･古布などで運ばれて普及した。金銀山で栄えた相川には、他国からたくさんの綿布や古布、裂織草が運ばれてきた。また、都市である相川で消費された古布もたくさんあった。これらの古布の多くは海府に運ばれて衣服になった。木綿布は肌触りが良くて暖かいので、ひとえで衣服にするだけでなく、数枚重ねて麻糸で刺してゾンザという仕事着を作った。また細く裂いて紐状にしたものをヨコ糸にして織り（裂織）、仕事着にした。裂織の仕事着は厚地で風をとおさないので防寒着に適した。戸外での海や山仕事の多かった海府の暮らしに欠くことのできない衣服になった。

海府の衣料について、『佐渡四民風俗』は「外海府村々（中略）男は薪を伐り炭を焚き、女は裂織を織り山苧トウ子を織り級を織り、其外藤布等をも織り候由尤木綿布は勿論に候」、「男は裂織、女は山苧トウ子を着し（以下略）」と記し、近頃の国中の百姓の衣類は相川の町の者と同じになっているが、海府の者は変わっていないと述べている[129]。

また、天保期の佐渡奉行川路三左衛門も裂織に興味をもったようである。「銀山を見回るときに裂織を着る」、「相川祭りに家来の下働きの者が素肌に裂織を着ていた」、「大間の港に下ろされた大坂からの俵に入っているのは、古い布で洗って裂いて裂織はんてんを作ると聞いて裂織の意味を理解した」などと『島根のすさみ』に書いている[130]。

### ⅲ）裂織のある暮らし

大佐渡北海岸地域では、仕事着をヤマギと呼ぶ。ヤマは農地を指すことばでもあり、段丘上の農作業をヤマ仕事と表現する。ヤマギは労働内容や季節、素材によって大きく三つに分けられる。シナやフジ、アサ類など樹皮･草皮からの繊維で織った布は、トウネ・カタビラと呼ぶ夏用の仕事着、木綿布を数枚重ねてアサ糸や木綿糸で刺したゾンザ（ドンザともいう）は一般的な仕事着であった。裂織で作ったツヅレ・サッコリは防寒用に、また布地が厚く直射日光や虫から肌を守ってくれるので夏にも着用し、稲刈りには半袖、漁に出るときは巻袖、夜具は大平袖と袖の形や着丈を変えて着用した。このほか帯や前掛け、カタカケ（背中当て）なども作った。

裂織はネマリバタと呼ぶ地機で織る。太いヨコ糸を織り込むのに適した機として長く使い続けられてきた。タテ糸に使う樹皮・草皮は、山や沢から採って紡いで糸にした。裂織はヨコ糸が太いため重いので和紙を混ぜて軽くした。和紙には保温性があるので暖かく、また雨がしみ込むのを防いだ。和紙は相川から古紙を買った。

裂織を織り、ゾンザを刺すのは女性の仕事であった。農作業の合間に、材木を運搬するオイコに出る生活の中で、わずかな時間を見つけて機織りをした。織った布は家族の衣服となり、裂織の仕事着は昭和30年代まで着用したが、その後は既製の作業着や防水性雨具に変わった。裂織は機織りの好きな女性によって織り続けられてきた。

### ⅳ）裂織の現況

昭和34～36年（1954～56）、九学会連合の調査で佐渡に来た古川静江は、宮本常一の助言を受けてシナ織りや裂織を調査した。畑野の市で「つづれ織りのカタアテ」を売っていたことを報告している[131]。

その後、昭和45年からはじまった相川町史編纂事業のなかで、宮本常一の指導で佐藤利夫が中心となって織物調査をおこなった。裂織の仕事着やシナ布、織機などの紡織用具が大事に保管されていて、金銀山の影響を強く受けた海府の村々の自給的な衣料製作の様子が明らかになった。それらの資料を収集した「佐渡・海府の紡織用具と製品」は昭和51年に国の重要有形民俗文化財に指定された。民俗文化財は大事に保存するだけでなく、生きた伝承として継続することが大事であるので、指定をきっかけに、講座を開いて織物技術の伝承に力を入れるようになった。佐渡島内だけでなく、宿泊しての長期受講者も増え、また体験学習をとおしての普及活動は広く知られるようになった。織物技術だけでなく、古い布を捨てないで再利用することや少ない材料から形あるものを作り出す豊かな創造性も受け継がれている。

（柳平則子）

図３―４７　裂織の製作

# ２．鉱山都市相川の信仰

## （1）鉱山都市における信仰と寺社

近世に成立した鉱山都市相川は、「草木もなびく」勢いで急激な人口増加にともなう人の移動があった。人の移動により他国から多くの文化がもち込まれた。その一つが信仰であろう。寺社の多さもそのことを示している。

### ｉ）神　　社

佐渡の神社については平成17年に新潟県神社庁佐渡地区協議会から『佐渡「神々のおやしろ」』が発行されている。相川の神社についてはこれに依拠しながら記した。なお記述の一部は『佐渡相川志』(132)、「佐渡国寺社境内案内帳」(133)、『佐渡相川の歴史　資料集９　相川の民俗Ｉ』、『平成佐渡神社誌』、『平成佐渡神社誌（続）』等で補った（表３―１７）。

表を通覧すると、相川に所在する神社の多くが、金銀山の採掘や廻船等による流通・海上交通などと関連していることが読みとれる。また、相川では、金銀山を中心に多様な生業が展開され、それが鉱山都市相川を成立せしめたことはすでに第１節で言及したとおりである。そうした多様な生業と結びつく神社が、現在までも継承されていることは、歴史的な積み重ねの上に形成された鉱山都市景観を考えるうえで重要である。

そのなかでも、大山祇神社と善知鳥神社は、それぞれ鉱山の繁栄と安全を守る神、相川の鎮守として現在でも地域に深く根付いており、それぞれの神社の祭礼である鉱山祭り、相川祭りは地域信仰の源泉としても、また観光対象としても重要な役割を果たしている。この点については次項で改めて言及する。

### ii）寺　　院

寺院に関しては、土地利用の観点から第５章第１節３においても詳述されるので、ここでは概要に留める。相川に現存する寺院を表３―１８にまとめた。これによって明らかなとおり、山師などと関連する寺院も多くある。また、すでに廃寺になったものも含めて多くの寺院がこの地に建立されたことは、多くの人が金銀山に引き寄せられ、この地に集住した結果であると考えられる。

他方で、鉱山採掘の休止とともに過疎・高齢化の進行は著しく、その継承は困難になりつつある。こうした寺院の継承について現地調査を元に検討した中谷は、以下のように指摘している(134)。

まず、現在宗教活動を継続している相川の30の寺院は、規模は小さく、文化的価値が認められ、文化財に指定されているものはない。しかし、境内に佐渡奉行の墓や供養塔等がある寺院は多い。

また、現在立地が明らかとなっている寺院跡地は、廃寺となった後も宗教上の信仰の対象物及び墓地が残されることから現在までその土地を維持し続け、半永久的にその場に存在することができる石造物をもって、江戸時代から現在に至るまでの歴史的連続性を「かたち」として見いだすことができる空間である。これは、現代の相川において、特色ある空間を作り出している。

相川の寺院の現状分析をおこなった中谷の指摘からは、佐渡相川の鉱山都市景観における寺院や寺町の重要性が自ずと明らかになってくる。廃寺という波のなかで、信仰空間という機能に限らないかたちで、いかにしてこうした空間を継承していくかは今後の重要な課題といえよう。

（池田哲夫）

表３―１７　相川市街地に現存する神社とその由緒

| 神社名 | 所在地 | 祭　　神 | 由　　緒 | 例祭日 |
|---|---|---|---|---|
| 熊野神社 | 相川鹿伏 | 伊弉冊尊　速玉命　事解命 | 明治以前の名称は「十二権現」。創建年等不詳であるが、一説に、天和年中（1681～83）に小倉大納言が勧請したとされる。口碑によれば、御神体は石で海から上がったという。 | 10月13日 |
| 善知鳥神社 | 相川下戸村 | 神直日神　大直日神　八十枉津日神　底筒男命　中筒男命　表筒男命　底津少童命　中津少童命　表津少童命　合祀　東照宮（下山之神町より）　大日霊貴命　手力雄命　豊秋津姫命（鹿伏大神宮より）　境内社　稲荷神社　岩戸神社 | 一説には仁平元年（1151）の創建といわれるが、妄説とする説もある。享保期（1716～35）に下戸村の現在地に移るまで、社地・社領に変遷があり、下相川の戸河神社下に善知鳥神社の元宮跡と伝える祠がある。元々は「住吉大明神」と称していたが、移転後、現在地の旧郷名にちなみ改称した。鹿伏から下相川までの総鎮守。昭和11年（1936）隣接地にあった鹿伏大神宮を合併、昭和29年に下山之神町の東照宮を合祀、現在、下山之神町愛宕神社の御神体も合祀している。 | 10月19日 |
| 春日神社 | 相川下戸村 | 武甕槌命　斉主命　天津児屋根命　姫大神 | 慶長10年（1605）鹿伏村春日崎に勧請、姫大神宮と称した。慶長12年春日大明神と称し、元和５年（1619）現在地に遷宮。正保２年（1645）境内に舞台を設け、能楽や神楽を奉じた。 | ４月５日 |

| 神社名 | 所在地 | 祭　　神 | 由　　緒 | 例祭日 |
|---|---|---|---|---|
| 北野神社 | 相川下戸村 | 菅原道真朝臣　境内社　市杵島姫命 | 明治以前の名称は「弁天」。初めは、金光寺の鎮守として勧請された。金光寺は慶長６年（1601）に創建され、菅原道真の像を安置、元和９年（1623）境内に社殿を建築。金光寺は明治元年（1868）の廃仏毀釈で廃寺となり、寺領がすべて北野神社の社領となる。下戸村、下戸炭屋浜町の産土神として祀られている。次助町の北野神社も合祀。 | ６月 25 日 |
| 熊野神社 | 相川下戸村 | 伊弉册尊　事解男命　速玉男命　合殿（稲荷神社）倉稲魂命　応神天皇 | 永享 12 年（1440）、羽茂の飯岡より当地へ勧請し、当初の名称は「十二権現」であった。初めは下戸村惣四郎の地神であったが、元禄年中（1688 ～ 1703）下戸村・下戸各町・海士町など下戸９カ町村の産土神となる。元文年間（1736 ～ 41）社号を「稲荷大明神」と改めたことがある。 | ９月 10 日 |
| 金刀比羅神社 | 相川五郎左衛門町 | 崇徳天皇　大物主命　事代主命　境内社　猿田比古命 | 永禄３年（1560）讃岐国金比羅から吉井村に勧請。寛永 17 年（1640）現社殿の上の台地に遷宮。延宝３年（1675）町人の五郎左衛門が現在地に社殿を造営。五郎左衛門は金山を稼いでいたが、金山が衰えたとき鉱石 10 荷掘り出せば筵１枚ずつ納めると願をかけたところ功徳があったので、社殿を改築したという伝承もある。氏子は五郎左衛門町、二町目、三町目などである。この神社は海上安全の神として広く信仰を集め、全島より絵馬が奉納されている。 | ８月 10 日（近年は４月におこなっていたが、現在は中止） |
| 塩竈神社 | 相川江戸沢町 | 塩土老翁命　猿田比古命　配祀　経津主命　建御雷命　境内社　稲荷神社　倉稲魂命　菅原道真朝臣　厳島姫命 | 文禄元年（1592）創建。もとは塩屋町の後背地にあったが、近くに牢屋・処刑場ができたため、寛永６年（1629）本昌寺境内の現在地に移される。明治元年（1868）本昌寺廃寺後、同寺の境内がすべて社地となる。氏子は羽田町、塩屋町、新材木町、羽田浜、一町目、一町目裏町、一町目浜町、羽田村、門前町などである。 | ５月 15 日 |
| 八幡宮 | 相川下山之神町 | 誉田別尊　気長足姫尊　玉依姫命　境内社　若宮社　仁徳天皇 | 創建年代については、天禄２年（970）、正和３年（1314）、慶長６年（1601）、元和７年（1621）など諸説あり不明。初め大間町に勧請、以後柴町上方、炭屋町北方院山へ移ったが、町並みの拡大により元和７年下山之神町南側に移り、享保４年（1719）現在地に鎮座した。氏子は下山之神町、紙屋町、大間町、濁川町、小六町、板町、材木町、石扣町、西坂、坂下町である。 | ６月 15 日<br>流鏑馬あり |
| 大山祇神社 | 相川下山之神町 | 大山祇命　木花開那姫命　合祀　軻遇突智命　天照皇大神 | 慶長 10 年（1605）金銀山の安泰と繁栄を祈願するため大久保長安が建立。以後代々の佐渡奉行によって手厚く保護されてきた。明治 33 年（1900）廃社となった上山之神町の大山祇神社を合祀している。 | ７月 13 日（現在は毎年７月下旬に不定期でおこなわれている） |
| 大神宮 | 相川夕白町 | 大日霎貴尊 | 明治以前の名称は「神明」。初め銀山稼ぎの者により北沢川向かいの山岸に勧請されたが、延享３年（1746）夕白町の現在地に移された。 | ８月１日 |
| 北野神社 | 相川大工町 | 菅原道真朝臣 | 明治以前の名称は「天神」。天正年中（1573 ～ 91）沢根村白山城中に勧請され、白山城廃城の際、相川次助町の西光寺に天神像を納めたことに始まる。明治元年（1868）弥十郎町の北野神社（廃社）に合併されるが、明治 16 年復旧、昭和２年（1927）以後大工町の現在地に移される。氏子は諏訪町、大工町、次助町、上南沢町である。 | ５月 25 日 |
| 稲荷神社 | 相川五郎左衛門町 | 倉稲魂命 | 元禄２年（1689）創設。金銀山の金児・関東弥右衛門の夢枕に翁が現れ、鳥越間歩に良好の鉱脈があると告げ、試掘すると大量の鉱脈を発見し、その報恩のため当社を創建したという。通称「関東稲荷」とも呼ばれる。 | ９月 28 日 |
| 風宮神社 | 相川柴町 | 級長戸辺命　級津彦命　合祀　北野神社　菅原道真朝臣　弁天　厳島姫命 | 寛永元年（1624）の創建とされるが、同３年（1626）の説もある。現在地に移る前は、耳岩と呼ばれる場所に鎮座していた。風の神様として知られる。氏子は柴町と水金町。昭和 29 年（1954）、同町内の北野神社（慶長７年＝ 1602、山主渡辺次郎左衛門が甲斐国より移祀）を合併、平成５年には、度々の高浪で修復困難となった富崎の弁天も合祀する。 | ６月 15 日 |
| 戸河神社 | 下相川 | 戸川（河）藤五郎　合祀　須勢理姫命　豊玉姫命　倉稲魂命 | 最初祠は戸川沢にあり、慶長６年（1601）現在地に移す。祭神の戸河藤五郎は、佐渡での炭焼きの開祖といわれ、下相川山の雑木を伐って炭を焼き、土地を開放して民家の建造を促進し、下相川村一帯を築くにいたったという。藤五郎は永禄の頃（1558 ～ 70）に駿河国から来て、下相川の日蓮宗本興寺境内に住んだという。金銀山の発見とともに製錬用の炭の需要が急増し、下相川の地に業者が多く集まってきた。当初は「藤五郎権現」、次に「戸河権現」、明治維新後「富崎霊社」、明治 41 年（1908）「戸河神社」となる。 | ６月 14 日 |
| 百足山神社 | 下相川 | 須勢理姫命 | 下相川のはずれに浄土宗霊山寺（廃寺）があり、境内の山の上に産土権現を勧請していたが、安永３年（1774）、山の石穴から長さ１丈余りもある百足が出現したのでここに鎮祭したという。以前は「見上権現」と称していたが、明治 11 年（1878）改称した。 | ６月 14 日（戸河神社と合同） |
| 高任神社 | 相川銀山町 | 大島高任 | 明治 18 年（1885）に佐渡鉱山局長に任命され、鉱山の近代化に尽力した大島高任を祀っている。 | ５月 13 日 |

| 神社名 | 所在地 | 祭　　神 | 由　　緒 | 例祭日 |
|---|---|---|---|---|
| 二ツ岩大明神 | 相川下戸村 | 団三郎狢 | 下戸村の集落から離れた小高い山にある巨岩･二ツ岩は､元々は山伏の修験の場であったが、相川で金銀の製錬に使用する鞴に張るため狢の皮が大量に必要とされたこともあって、狢を祀る信仰が生まれたのではないかとされている｡狢の神は、家内安全、病気平癒、祈願成就など現世利益があると信じられ、毎月 12 日の縁日には参詣者が多く、大願成就すると参道に鳥居が奉納される。 | ４月 12 日 |

「佐渡国寺社境内案内帳」･『佐渡相川志』･『相川町誌』･『佐渡相川の歴史　資料集八』･『佐渡相川郷土史事典』などにより作成。

表３―１８　相川市街地に現存する寺院とその由緒

| 寺院名 | 宗派 | 所在地 | 開基年 | 由　　緒 |
|---|---|---|---|---|
| 本興寺 | 日蓮宗 | 下相川 | 永正３年（1506） | 竹田村世尊寺 14 世本興院日儀上人が妙法公布の道場として創建。最初の寺地は不明。慶長６年（1601）以後現在地に建立。 |
| 妙円寺 | 日蓮宗 | 相川下寺町 | 慶長元年（1596） | 初め鶴子四十物町に創建、その後相川次助町に移転。享保元年（1716）下寺町の現在地（元山師味方孫太夫の屋敷）に移る（次助町の旧寺地は妙伝寺に譲る）。境内に、明治末の鉱山坑夫の鈴木部屋の「坑夫人足供養塔」がある。 |
| 法輪寺 | 日蓮宗 | 相川下寺町 | 慶長年中（1596 ～ 1614） | 下寺町東側の三本橋に妙蓮寺として創建。寛文９年（1669）妙輪寺と改称。明治 39 年（1906）名義を長崎県へ移すことになった円徳寺の建物に寺基を移す。昭和 17 年（1942）上寺町の法久寺と合併して法輪寺と改称。境内には、江戸無宿寄進の石灯籠があり、墓地には山師味方与次郎右衛門一族の五輪塔が並んでいる。 |
| 玉泉寺 | 日蓮宗 | 相川五郎左衛門町 | 慶長 11 年（1606） | 京都妙顕寺 13 世日紀が渡海して下寺町西側（観音寺の向かい）に創建。寛永 14 年（1637）五郎左衛門町の現在地に移転。 |
| 蓮長寺 | 日蓮宗 | 相川下寺町 | 元和５年（1619） | 京都妙覚寺 18 世日奥上人に随行して渡海した日円が上相川の山之神町に蓮体寺を創建、寛文８年（1668）下寺町に移り寺号を蓮長寺と改める。延宝２年（1674）下寺町の来迎寺跡地へ移転。 |
| 本典寺 | 日蓮宗 | 相川下寺町 | 元和９年（1623） | 京都要法寺 21 世日躰上人が渡海してこの地に庵を結ぶ。京都出身の相川京町の豪商山田吉右衛門が本願主となり寛永６年 (1629) に寺を建立して寄進。寛文年中（1661 ～ 72）上相川の本行寺を合併。境内には、佐渡奉行荻原源八郎の墓、その父で同じく佐渡奉行の荻原重秀の供養塔がある。 |
| 法泉寺 | 日蓮宗 | 相川下山之神町 | 寛永元年（1624） | 新穂大野の根本寺 13 世日行が開基。初め沢根五十里村に建立、寛永６年（1629）相川下山之神町に移転、宝永元年 (1704) 同じ下山之神町の現在地に移る。 |
| 円行寺 | 日蓮宗 | 相川五郎左衛門町 | 寛永元年（1624） | 創建当時の場所は不明。寛永５年（1628）五郎左衛門町へ移転。 |
| 瑞仙寺 | 日蓮宗 | 相川中寺町 | 寛永元年（1624） | 山師味方但馬（２代家政、家次とも）が、元和９年（1623）京都で没した父（初代家重）の菩提を弔うため根本寺 12 世日郷を開基として建立、父の法号瑞仙院日栄を以て寺号とする。境内には、味方但馬（のち孫太夫）一族の墓がある。 |
| 広永寺 | 浄土真宗 | 相川羽田町 | 慶長８年（1603） | 佐渡片貝村（佐和田地区山田）の僧円照が開基。創建当初は加賀国専光寺末、明治以後京都東本願寺末。広永寺什物の教如上人寿像裏書（慶長８年）に「佐州雑太郡河原田郷中原村広永寺什物也」とあることから、相川金銀山の開発に伴い中原村から相川へ寺が移されたことが推測できる。 |
| 蓮光寺 | 浄土真宗 | 相川左門町 | 慶長８年（1603） | 越中国砺波の厳照寺４世（５世とも）が砺波に蓮光寺を建立、慶長８年（７年とも）佐渡に渡り相川左門町に蓮光寺を建立。境内には、佐渡奉行本目隼人の墓がある。 |
| 大福寺 | 浄土真宗 | 相川六右衛門町 | 慶長 17 年（1612） | 越中国砺波の僧宗俊が渡海して相川六右衛門町に建立。大福寺の建つ場所は上京町の上の丸山と呼ばれる所であることから、通称「丸山大福寺」と呼ばれる。 |
| 光楽寺 | 浄土真宗 | 相川炭屋町 | 慶長 19 年（1614） | 加賀国河北郡笠野村の光楽寺より僧行春が渡海して相川板町西側に寺を建てたが、風浪激しく次第に境内が侵食されたため元禄３年（1690）炭屋町東側の現在地へ移る。 |
| 長明寺 | 浄土真宗 | 相川南沢町 | 慶長 19 年（1614） | 慶長 18 年（1613）越中国新川郡より僧浄誓が渡海して、初め北片辺村の炭釜新町に寺を開き、翌年相川南沢町に移り長明寺として寺格を得る。境内に、山師下田清左衛門の宝筐印塔がある。 |
| 常徳寺 | 浄土真宗 | 相川羽田町 | 元和元年（1615） | 越前国福井出身の僧明専が渡海して寺を開く。元和４年（1615）門徒衆の願いにより本山の京都西本願寺の別院となり、御坊と呼ばれて本山から輪番で僧が派遣された。鉱山の衰えによって門徒が減り寺も衰退したため、元禄年中（1688 ～ 1703）別院を止め、大坂道頓堀の常徳寺より常住の僧を派遣してもらい寺号を常徳寺と定める。 |
| 永宮寺 | 浄土真宗 | 相川一町目裏町 | 元和３年（1617） | 越前国坂北郡金津の永宮寺５世了祐が渡海して相川石扣町に建立。承応２年（1653）一町目裏町の現在地に移る。寺号を永弘寺と改めるが､宝暦 11 年（1761）再び永宮寺にもどす。 |
| 万照寺 | 浄土真宗 | 相川諏訪町 | 元和５年（1619） | 開基空乗（一説には加賀国の僧）。明暦年中（1655 ～ 57）に次助町の浄願寺を合併、元禄年中（1688 ～ 1703）に末寺の誠証寺・安楽寺（天和年中 <1681 ～ 83> に誠証寺に合併）を合併（『相川町誌』）。昭和 17 年（1942）上相川奈良町の専照寺と合併して万照寺と改める。境内には、流人大岡源右衛門・源三郎親子の墓がある。 |
| 相運寺 | 真言宗 | 相川中寺町 | 慶長７年（1602） | 開基不明。初め相川次助町に建立。慶安年中（1648 ～ 51）一度廃寺となるが、本寺の沢根曼荼羅寺の尊誉が中興の祖となり享保元年（1716）地蔵寺と慈眼寺を合併して中寺町の地蔵寺を相運寺とする。 |
| 観音寺 | 真言宗 | 相川鹿伏 | 不明（慶長 13 年 <1608> 以前か） | 開基不明。慶長 13 年（1608）再建立との記録（「寺社帳」）があるので、それ以前の創建と考えられる。流人の小倉大納言父子と親交のあった寺として知られる。本堂裏の墓地に小倉実起・公連親子の墓がある。 |
| 大乗寺 | 真言宗 | 相川下山之神町 | 慶長 17 年（1612） | 開基宥詮。武蔵国護持院末（古くは常陸国智足院末）。佐渡奉行所留守居役の岡林伝右衛門が持仏の聖観音像を寄進、慶安元年（1648）境内に観音堂を建立して安置する。 |

| 寺院名 | 宗派 | 所在地 | 開基年 | 由　　緒 |
|---|---|---|---|---|
| 福泉寺 | 真言宗 | 相川下寺町 | 慶長17年（1612） | 開基より５世まで不明。６世宿伝が中興。初めは現在地より下の墓地の場所に建っていたが、貞享２年（1685）、左門町へ移転した浄土宗西念寺の跡地に再建立して移転。 |
| 真如院 | 真言宗 | 相川下寺町 | 慶長18年（1613） | 開基不明。寛文３年（1663）佐渡へ流罪になった丹波国氷上郡真言宗岩龍寺住職腎清（還俗して医師北條道益となり相川弥十郎町に住み、赦免後泉に移る）の兄朝慶（貞享元年<1684>没）が住職をしていた。 |
| 金剛院 | 真言宗 | 相川五郎左衛門町 | 元和７年（1621） | 開基不明。古くは相運寺末であったが、正徳６年（1716）以後沢根村曼荼羅寺末となる。五郎左衛門町を開発した山師の樋口五郎左衛門一族ゆかりの寺。 |
| 大安寺 | 浄土宗 | 相川江戸沢町 | 慶長11年（1606） | 佐渡代官大久保長安が逆修寺として建立。寺号は大久保長安の名に因む。開基は京都大雲院聖誉貞安。境内には、大久保長安逆修塔、河村彦左衛門供養塔、宗岡佐渡寄進の六字名号塔、佐渡奉行岡松八右衛門・棟梁水田与左衛門の墓がある。 |
| 法然寺 | 浄土宗 | 相川下寺町 | 慶長11年（1606） | 応仁年中（1467～68）京都より行念上人が渡海、河崎村に法界寺を創建、その後、河原田大坂町、鶴子銀山町を経て慶長11年（1606）相川下寺町に移り、堪誉（行念より数えて９世）が中興の祖となる。文化８年（1811）寺号を法然寺と改める。境内には、佐渡奉行伊丹康勝の供養塔、同大熊善太郎の墓がある。 |
| 立岩寺 | 浄土宗 | 相川下戸村 | 慶長年中（1596～1614） | 開基教誉源道。最初相川四町目西側に建立、寺号はそこにあった岩に因む。寛永６年（1629）現在地に移転、享保３年（1718）上の台地に建て直したが再び現在地にもどす。大正12年（1923）の新道改築に際し境内地の一部を収用される。 |
| 広源寺 | 浄土宗 | 相川南沢町 | 元和７年（1621） | 伊豆国の専誉上人が渡海して開基。佐渡奉行竹村九郎右衛門が願主となり相川一町目・二町目境に建立。明治10年（1877）現在地に移る。 |
| 観音寺 | 曹洞宗 | 相川下寺町 | 慶長19年（1614） | 信濃国根津定律院７世弟子の広沢和尚が渡海して開基。広沢和尚に帰依した越後出身の後藤某が寺を建立して寄進したと伝える。 |
| 総源寺 | 曹洞宗 | 相川下山之神町 | 元和５年（1619） | 吉井剛安寺６世周珊が開基。寛永６年（1629）（同７年ともあり）曹洞宗の佐渡総録所となり宗内63カ寺を支配する（明治14年<1881>録所廃止）。境内には、佐渡奉行飯塚伊兵衛、同篠山十兵衛、同鈴木伝市郎の墓、清音比丘尼の墓標がある。 |
| 弾誓寺 | 天台宗 | 相川四町目 | 寛永13年（1636） | 開基木食長音。相模国浄発願寺末。寺号は長音の師木食但唱が木食弾誓の弟子であったことに因む。長音作の本尊が６尺２寸もあることから、通称「大仏（おほとけ）」と呼ばれる。毎年大仏の回向が行われ多くの信者が集まった。境内には佐渡奉行角南主膳の墓がある。 |

「佐渡国寺社境内案内帳」・『佐渡相川志』・『相川町誌』・『佐渡相川の歴史　資料集八』・『佐渡相川郷土史事典』などにより作成。

### （2）鉱山都市における祭礼

相川の祭礼のうち、代表的なものとして７月下旬の鉱山祭り（大山祇神社）と10月19日の相川祭り（善知鳥神社）があげられる。前者は鉱山の安寧を祈願する祭礼であり、後者は町の安寧を祈願する祭礼として位置づけられる。

#### ⅰ）鉱山祭り

鉱山祭りは、江戸時代以後途絶えていた大山祇神社の祭礼を、明治20年（1887）に佐渡鉱山局長の大島高任が復活させたのが始まりといわれ、鉱山の繁栄を願って奉納される祝い歌の「やわらぎ」もこのとき復活した。大島は荒廃していた大山祇神社を修築するとともに、ドイツのフライベルグ鉱山の祭典をならい、隊列ごとに山車や提灯を添えた行列が鉱山を出発して町中をねり歩くなど、にぎやかな祭典にした。祭礼日は時代ごとに変化しており、一定ではない。また、大山祇神社のある下山之神町では綱引きや角力、能楽などが催され、花火が打ち上げられた。現在では、おけさ流し、野外ステージ公演、花火大会などがおこなわれ、夏の観光シーズンの到来を知らせるイベントともなっている。

かつては鉱山に近い地区も含んで祭礼の巡行などがおこなわれていたが、現在は下町のみでおこなわれている。

なお、鉱山祭りのようすを伝える古写真が多く残されており、かつての祭礼の盛大さを知ることができると同時に、鉱山祭りが頻繁に撮影対象とされたことからも、鉱山祭りの地域における象徴的役割をみてとることができる（図３―４８）。

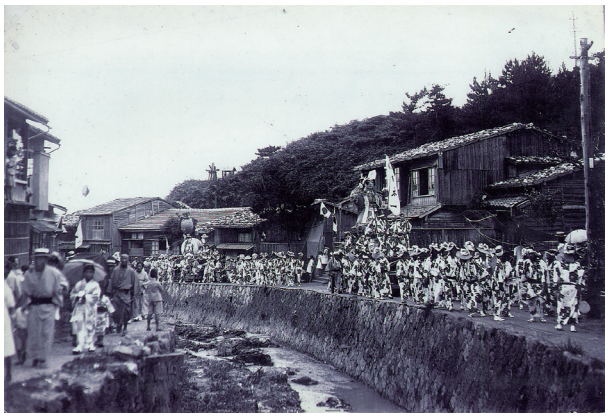

図３―４８　濁川町をねり歩く「おけさ流し」

#### ⅱ）善知鳥神社例祭（相川祭り）

『佐渡年代記』によれば、善知鳥神社例祭（以下、相川祭りとする）は寛永20年（1643）にその始まりをたどることができる。同年、伊丹奉行の寄進によって神輿が作られ、神輿渡御は、西坂をのぼって奉行所の前を通ることが取り決められた。

神輿行列は風流となり、「相川善知鳥社祭礼絵巻」（延亨３年＝1746）や「天保年間相川十二ヶ月」（石井文海作）にも描かれている。後者には、風流の前後にネブタ、

竿燈、５台のダンジリなどが描かれ、盛大な祭礼の様相を描いている（図３―５１）。

現在はそこまでの大規模さと華やかさはないが、相川の歴史を伝える祭りとして継承されている。そこで、次に現在の祭礼についてみていく。

祭礼は毎年 10 月 19 日におこなわれ、午前中には天狗が馬に乗り、地域を清めてまわる。また、太鼓、獅子、下り羽はそれぞれ下町を中心とした地区内の各家を巡り、奏で、舞う。

午後には神事がおこなわれた後、神輿の上に善知鳥が載せられる。この行事は、その年の年男のなかから選ばれた人（１人）の仕事であり、地元では選ばれることは大変な誇りとされている。さらに、綱切りがおこなわれた後、御神幸が発れんする。神輿のほか、各町内の名が入った高張提灯、太鼓組、獅子組、下り羽などが行列となり、神社―鹿伏―下町―上町―下町―神社という流れで巡幸する。太鼓、獅子、下り羽は、町内ごとに決まっており、太鼓組は大工町、獅子組は小六町・石扣町、そして下り羽は下戸３町が担当する。現在では、各町が中心となり、相川全域から参加希望者を募って構成されている。

前述の内容で構成される祭礼行列は、午後２時に神社を発れんし、神社に戻り遷宮がおこなわれるのは午後 10 時頃である。その間、三町目周辺の１カ所（松栄家などのことが多い）、上町の２カ所（北野神社、大神宮）、柴町の１カ所（御旅所）などで休憩をとる。特に大神宮では１時間ほど休憩し、夕食もとる。

北沢地区の相川郷土博物館前で神輿を一旦止める。そして、神輿前に祭壇を設置し、宮司による祝詞奉納と、

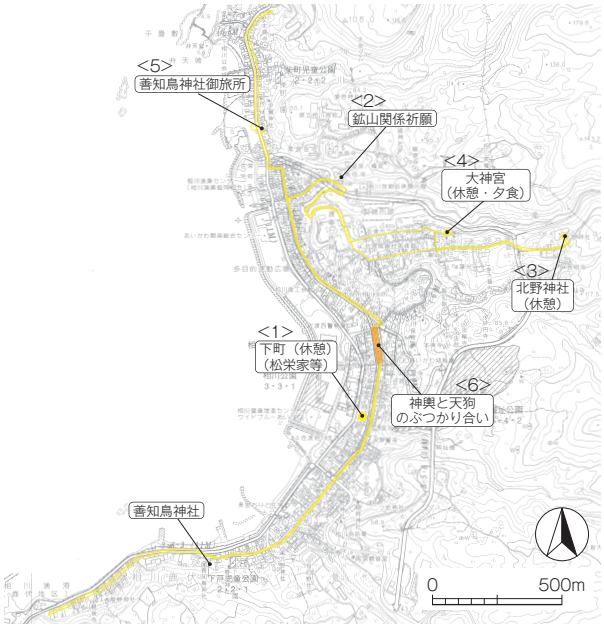


図３―４９　相川祭りの巡幸路と御旅所

浦安の舞の奉納がおこなわれる。ここには、ゴールデン佐渡社長らも参列し、鉱山由来の伝統として重要である。

また、祭りの終盤に、柴町において参加者に紅白提灯と竹笹、ローソクを配布する。柴町の御旅所から神社への還幸は参加者も神輿について歩く。また、一町目（天領通り商店街）では天狗が神輿の行く手を塞ぐ。比較的新しい慣行という指摘もあるが、祭礼の終焉を名残惜しむものと捉えられる。一町目を通過すると、紅白提灯に火を入れ、参加者も神社に向かう。そして、提灯と引き換えに紅白饅頭を受け取って、その年の祭礼は終わる。

なお、相川祭りの巡幸行列は、道幅や軒高など相川のまちのスケールと調和し、引き立て合うものである。例えば、神輿の幅は上町における京町通りの道幅と合致し、祭礼行列をひきたたせる。つまり、町並みを中心とした地域の景観の継承は、こうした祭礼空間を継承することでもある。町並みが崩れれば、神輿や祭礼行列はひきたたなくなっていく。こうしたスケール感も、町並みという景観要素の保護継承を考える上で重要な観点である。

相川では、相川祭りが終わると本格的な冬を迎えるとされている。それは強風吹きすさぶ厳しい季節の到来でもある。そうした環境のなかで、相川祭りは、秋から冬への風物詩として地域の文化にとって果たしている役割は大きい。　（菊地淑人）

図３―５０　相川祭りの巡幸行列（2013 年）

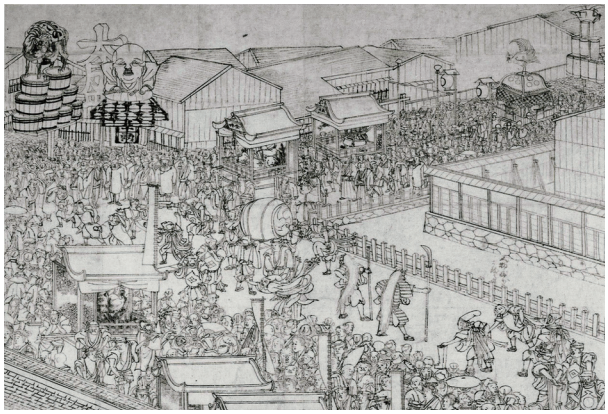

図３―５１　「天保年間相川十二ヶ月」に描かれた善知島社祭礼

### (3) 相川における伝説・伝承

相川には、鉱山に関わる伝説・伝承は枚挙にいとまがないが、ここでは百足山大権現・関東稲荷・大日堂にまつわる伝説・伝承の概要を述べる。

#### ⅰ）百足山大権現

下相川集落の北のはずれに、「百足山」と呼ばれる岩山がそびえ立つ。その中腹にある小さな社殿が百足山神社であり、長さ１丈余り（約３ｍ）の百足が住み、享保年間（1716～35）に二度出現したという記録がある[135]。また、かつて百足山の麓にあった浄土宗霊山寺の和尚の夢に、お寺を７回り半めぐって立ち去る百足が出た、という伝承が残る[136]。

相川では、鉱脈の走る形状が百足に似ていることと、百足＝多足＝福神信仰が結びついて、百足は金銀山の繁栄をもたらす神の使いとして信仰されており[137]、特に下相川では、百足を祀る信仰が現在も伝承されている。このほか下相川には、鉱石の粉成に用いる石磨の石材を切り出した石切場と石磨を加工する石工の存在を示す記録、金銀の製錬に必要な炭を供給する炭焼きの起源を伝える戸河神社[138]などが存在し、鉱山と密接に関係した近郊集落であったといえる。

#### ⅱ）関東稲荷（図３―５２）

鉱山にほど近い五郎右衛門町に、元禄２年（1689）創建と伝わる稲荷神社がある。明治６年（1873）に村社となる前は「関東稲荷」と呼ばれ、鳥越間歩の金児（かなこ）の関東弥右衛門の氏神であった。弥右衛門は、ある年の大晦日、借金取りから逃れるために入った坑道で上質の鉱石を発見し、間歩はたちまちに盛況となった。そこで、鉱石の発見のきっかけを与えてくれた金貸しに御礼をするとともに、日頃から崇拝している稲荷大明神を祀る神社を勧請し、この地に社殿を建てたという[139]。

稲荷神社は、その後も鉱山労働者の信仰を集め、かつては間ノ山や庄右衛門町を中心に40軒あまりの氏子がいたとされるが、現在は４、５軒ほどになっている。しかし、その中には弥右衛門の系譜を受け継ぐとされる「関東屋」の屋号をもつ家も含まれ、毎年９月28日の例祭日や正月には、関係者を集めての神事が、ささやかではあるが続けられている[140]。

#### ⅲ）大日堂（図３―５３）

下戸村に所在するが、海士町との境の地であるため通称「海士町大日堂」とも呼ばれている。寛永年中（1624～43）、小川村の道心者が建立したという[141]。現在も、金色木造の大日如来が安置されており、牛供養の霊験があるといわれ、境内の脇堂にはコンクリート製の牛の像が置かれている。

江戸時代、牛は主に農耕用に用いられたが、佐渡では鉱山でも使われたという記録がある。ひとつは、金銀の製錬に用いる炭を鉱山へ運ぶために多くの牛が用いられたといい、もうひとつは、製錬用のフイゴ（送風機）の内張りや、金穿大工が坑内を掘り進む時に腰につける敷皮に牛の皮が大量に用いられたという[142]。寛永19年（1642）には、佐渡奉行所より牛馬を他国に売ることを禁ずる御触れが出されるほど[143]、牛は重要視されていた。佐渡で牛に関わる信仰といえば、新穂地区瓜生屋の大日堂が有名であるが、江戸時代の寛文～延宝年間（1661～80）には、瓜生屋大日堂の毎月の縁日には相川からの参詣者がことのほか多かったという記録もあり[144]、相川での牛の信仰の強さは、鉱山との深い結びつきによるところが大きいと考えられる。相川の大日堂は、現在もその名残を伝える重要な信仰施設である。

このほかにも、相川には鉱山にまつわる伝説・伝承が数多く残っており、今も人々に語り継がれていることは、鉱山都市相川の特徴を物語るひとつの要素であるといえる。

（若林篤男）

図３―５２　関東稲荷

図３―５３　大日堂

# 第３節　小　結

本章では、鉱山都市相川の成立及びその盛衰について近世以降の展開を中心に通史的に論ずるとともに、鉱山都市の生活文化や風景観の変遷についても検討をおこなった。また、鉱山都市に由来する歴史の積み重ねの結果として、現在まで地域に継承されている工芸や信仰・祭礼、伝承・伝説等の文化的要素についてみてきた。

慶長６年（1601）に金銀山が発見されて以降、相川は金銀をはじめとする鉱物生産の場として江戸幕府における国家的な要地となった。そして、そうした大規模生産を支えるために、多くのひと・もの・文化が島の内外から集積し、消費されていった。あわせて、江戸幕府によって町立てがおこなわれ、都市構造が整えられていった。こうした地域の性格や都市構造は、その後、明治に皇室から三菱合資会社に鉱山が払い下げられて以降、平成元年に休山するまでのあいだ、一貫するものであった。都市構造は現在に至るまで継承されており、その具体像については第５章において仔細に分析される。本章ではその前提となる歴史的展開を提示した。

さて、前述のように、相川には様々なひとが居住し、鉱山都市の生活や文化を支えており、多様な職種が存在していた。近世には、鉱山労働者に限っても、そのなかは多様な職種に分かれ、分業体制が採られていた。そして、専業の労働者に限らず、農漁民の一部も業閑期に鉱山労働をおこなっていた。

また、町場の巨大な人口を支えるために、近郊農漁村の役割は重要であり、鉱山の開発とともに、近郊の農地開発も展開されていった。こうした多様な職業分化と、分業的な社会システムも相川の都市的な性格を高めていると考えられる。こうした点は、相川における空間の関係性のなかにも反映されるが、この点については第４章にてさらに検討をおこなう。

さて、地域内外の視点を通じた地域の表象は、地域の歴史的な重層性とその認知を考えるうえでも重要である。近江八景を参考に、宝永年中（1704 ～ 10）に地役人によって定められた「相川八景」は、近世における相川の景観認知を考えるうえで重要な資料である。そのなかのひとつに、「春日崎落雁」がある。春日崎は「道遊の割戸」や市街地を含む相川全体を海岸から一望できる岬である。現在の地域住民の景観認知を把握するためにおこなったアンケート結果でも、相川の残したい景観として「春日崎」が多く回答されており、春日崎は通史的に一貫して地域の象徴的景観として位置づけられた。

昭和の鉱物大増産を経て、戦後の相川は鉱山採掘は衰退の一途をたどった。そのなかで、観光の果たした役割は大きく、現在も観光産業は地域の重要な生業基盤である。鉱山観光は、おけさ踊りや名勝見学などと複合的に売りだされ、交通・宿泊など様々なインフラも整備されていくなかで成長していった。そして、鉱山関連施設も、観光という文脈のなかで位置づき、現在に生きる地域の景観の重要な一部となっている。

鉱山や鉱山都市に由来する様々な伝統文化も今に継承されている。例えば、伝統工芸である無名異焼は鉱山から排出される赤色の粘土を用いた焼き物であり、近世以降現在に至るまで継承されている。信仰においては、鉱山祭りと相川祭りという２つの神社祭礼が現在もおこなわれ、地域に深く根付いている。前者は鉱山採掘の安寧を願って始まったものである。後者は海の安寧祈願から始まったものの、のちに地域の安寧を広く願う町場の祭礼となり、相川全体を舞台におこなわれている。神輿渡御と空間のスケールが一致していることは重要である。

以上のように、鉱山都市相川は、鉱山採掘を社会の中心におきつつも、長期にわたる歴史的展開のなかで、多様な職種、分業型の社会、豊かな地域文化が成立し、採掘から観光という基幹産業の転換も経験してきた。鉱山都市としての基層はこうした俯瞰的に捉えられる社会の動態・様相にある。次章以降では、それを踏まえて、鉱山都市としての相川の位置づけについて３つの観点から各論的に分析する。　（奈良文化財研究所景観研究室）